

一六一四一―二八八

梅園全集版玄語で「附言」とされた部分は、書き下ろし後の綴じ込みの可能性があり、それを行ったのが梅園か黄鶴か不明であるので、書き下ろし直後の玄語の復元を目的とする本資料からは除外した。ただ内容は、玄語を理解する上で極めて重要なで別ファイルとして添付する。訂正は理解にとって有益であれば採用した。また同様の理由から、読み下し版では小細字の傍記も抹消せずに載せた。なお、これを中期の稿本からの転記とする指摘もあるが、いずれにせよ、安永本・浄書本に比べると語の用法にいささかの相違があり、それを●で消して訂正し、統一性を持たせようとしていることが窺える。

終りに近づくにつれて訂正が甚だしくなり、最後は書きなぐりの状態となっている。併せて、途中にも判読困難なところがあり、これらは訂正を採用した。また一六二四七以下はほぼ一頁にの全面小細字による記述で甚だ読みづらい。またこの部分は、文字が同様の小細字である一六二三九からさらに離されて書かれている。しかし、前述の通り、このいわゆる附言は、玄語を理解する上で貴重である。

なお、例旨の終りに「歴年二十三。換稿も亦た二十三。」とあるのは、安永四年時点のことであり、最終的には、「歴年三十七。換稿二十四にして未完」である。

○天冊の天なる者は、性なり、鬱淳の活なり。地冊の地なる者は、體なり、混淪の立なり。地冊二部は、没と爲し露と爲す。二部四界。天界の目を宇宙と曰い、方位と曰う。機界の目を轉持と曰い、形理と曰う。之を没部と爲す。體界の目を天地と曰い、華液と曰う。性界の目を日影と曰い、水燥と曰う。之を露部と爲す。而して方位なる者は、宇宙の痕なり。形理なる者は、轉持の靜なり。是に於て、宇宙轉持は綱を爲す。天地華液なる者は、性體の物なり。日影水燥なる者は、性體の氣なり。是に於て、天地華液を綱と爲す。一二分合の別より之を剖せば、宜しく先ず天地の動、形理の靜を以て、没中の動靜天地を探り、而して天地の體、華液の性を以て、露中の體性天地を偶して、以て其の條理を繹ぬべし。宇宙なる者は精なり。自から方位を以て天地を爲す。而して宙なる者は則ち袞袞の通、能く宇内に潛む。是を以て、宇は没露の一球を爲す者を容る。而して天地立つ。天地は體を以て物を成す。華液は性を以て物を成す。日影は性氣を以て播す。水燥は性用を以て布く。華は則ち日影なり。液は則ち水燥なり。水火なる者は、本と持中の物なり。或いは以て華液と爲す。蓋し水火の稱、地に於ては專主有り。擴げて華液を稱す。天に在つては日月を言う。皆な其の性に因りて言う。體界に於て既に華液を言い、又た性界に於ても日影水燥を言う。贅を爲すが如き然り。蓋し一なる者は體して合す。以て其の條貫を成す。二なる者は分ちて反す。以て其の理析を説く。火の虚の象、水の實の質、皆な物なり。天地華液は、體性を隔つと雖も、而も同じく體を有す。而して華液は反を以て反に對し、具を以て闕に向う。合せざれば、則ち此を成すこと能わず。故に體界の華液なる者は、虚象の物を以て實質の物に偶す。而して其の成る所は、此れに合して彼に成り。彼に合して此に成る。華液は既に體界に於て物を爲す。物は自から己の氣を有す。故に性界は、則ち日影は則ち寒熱の氣、明暗の色を播す。水燥は則ち乾潤の性、滋煦の才を布く。故に條貫は脈の通を觀る。理析は用の別を觀る。是を以て、天地華液は、相い得て一球を成す。而して日影水燥は、各おの不占心の兩圈を領し、政を上下

に布く。是に於て、宇一は没露の一球を容る。一球は連環を分つ。是に於て宇なる者は、含みて一なり。日影水燥なる者は、吐して二なり。以て大物を成す。故に地冊を讀む者は、先ず宜しく目意を解すべし。宇は則ち一中に方位を具し、轉持天地を合して之を容る。而して其の華液は既に其の體を立す。體立ちて其の性氣は其の才用を施す。地冊を讀む者は、宜しく先ず此の意を識りて、而して後、天地を探るべし。

○一なる者は數えずして足る。故に之を剖して破す可からざるに至るも、猶お一を盡さず。之を加えて載す可からざるに至るも、猶お一に至らず。強いて一元氣と曰う。一を擧げてを闕く。具を言いて闕を見す。故に玄なり。或ひと之を聞きて曰く。玄にして玄ならば、則ち何ぞ子の言に待たん。玄にして玄ならずんば、則ち何ぞ玄を言うを用いん。玄を言うを待ちて而して後玄ならば、玄は玄と爲すに足らず。玄、玄を言うを待たずんば、何ぞ子の玄に益さんと。曰く故に玄なり。

○天地を以て會易を剖けば、大地は各おの會易を具す。會易を以て天地を觀れば、會易は各おの天地を具す。分合の道、適くとして然らざる無きなり。

○條理を講ずる、須く剖析對待の經緯を審かにすべし。剖析は混糲食吐の觀を有す。對待は反比分合の態を有す。剖析すれば則ち一にして二なり。對待すれば則ち一は一に偶す。

○會成易成の圈は、會成易成の天地と同じからず。天圈と曰い、日影の圈と曰うは、便ち易成の圈なり。地圈と曰い、水燥の圈と曰うは、便ち會成の圈なり。共に不占心の環にして、分れて二を成す。轉持形理の没と、天地華液の露は、共に心在中に占め、合して一を成す。圈は外圓に就きて言い、環は中虚に依りて言う。天地の形は其の圓きこと毬の如し。故に地球は即ち地毯なり。水火の地は其の上に襲なる。或いは併せて實毬と謂う。或いは地球實毬を分つ。日月の毬は、水燥の上に襲なる。或いは天を併せて、虚毬と謂う。或いは天毬虚毬を分つ。圈と曰うと環と曰うと、意、稍や異なるなり。

○直圓は其の正に就きて言う。規矩は持平に由りて言う。西中東中、西線東線は、即ち赤道黄道なり。守軸環軸は、即ち赤軸黄軸なり。處に従いて其の聲を異にす。主の異なるに非ざるなり。輪軸と曰い、弦弧と曰う。假りて譬える所異なるのみ。

○性界なる者は、天地華液の物を體に歸して、色氣性才の氣を性に歸するの稱なり。色界なる者は、明暗を以て天地の體を分つの稱なり。是に於て體界に對するの性界は、色界に對するの性界と、自から別有り。

○體界に言う所は、則ち天地華液の體なり。

○性界に言う所は、則ち色氣性才の用なり。然り而して性中は色を明暗に屬す。性を乾潤に屬すれば、則ち亦た色界に對するの性界有り。

○明暗に色と曰い、黑白に彩と曰い、氣に交と曰い、物に接と曰う。條理の言なり。然れども散言は通稱に従う。

○人身の液に、數義有り。曰く氣液の液なる者は、氣に對するの名にして身中の滑澤なり。血液の液なる者は、血に對するの名にして表に在る者なり。裏に在れば則ち濁りて赤し。血の謂なり。表に出れば則ち清みて淡し。液の謂なり。故に液の分たるる者は皮表なり。而して經中の氣、脈中の液も、又た氣液の對名なり。氣液と稱すも、骨肉の氣液と別なり。

【これ以下、判読甚だ困難な小細字による草稿】

○一なる者は數えずして足る。故に之を剖して破す可からざるに至るも、猶お一を盡くさず。之を加えて載す可からざるに至るも、一に至らず。故に強いて命じて一元氣と曰う。一を擧げて一を闕く。具を言いて闕を見ず。故に玄と曰う。或ひと曰く。既に玄なり、何ぞ玄を言うを爲して、言を以て示さんや、何を以て玄とするや、玄にして玄ならば、何ぞ子に待たん。玄にして玄ならずんば、徒らに子の勞を觀んと。予答えて曰く。故に玄なり。

○天地を以て會易を觀れば。大中も亦た會易を具す。地中も亦た會易を具す。會易を以て天地を觀れば。會中も亦

た天地を具す。易中も亦た大地を具す。分合の道、適くして然らざる無きなり。露中は色體の二界を分つ。色なる者は性の見なり。體なる者は天地なり。性なる者は華液なり。之を體性の分と爲す。液は則ち水燥にして地球に合す。華は則ち日影にして地球に合す。之を天地の分と爲す。露部を讀む者は、之を辨ぜざれば、則ち將に其の辨に迷わん。故に水火は、地上に在りて言う者は、字の正誥なり。天地を通じて言えば、華液を指す。讀者は宜しく聲主を尋繹して之を分つべし。死聲を以て活主と認むること勿れ。

○比なる者は反の偶なり。反と謂えば則ち此れに有る者、彼れに無きなり。比と謂えば則ち此れに有る者、彼れに有るなり。而して比方の比は反比の比と別なり。

○交接の義は、氣に於て交と言う。質に於て接と言う。

○東西の行は、西するを轉と曰う。東するを運と曰う。歳時の行は、日月に成る者を歳と曰い、水燥に成る者を運と曰う。心の營は、意作に出づる者を爲と曰い、感應に出づる者を運と曰う。

○象なる者は。天に在りて見る可き者の稱なり。質なる者は、地に在りて取る可き者の稱なり。氣象は或いは日影を分ちて稱す。大言すれば則ち日影は共に象なり。虚動なる者は氣と曰う。氣質は或いは水燥を分ちて稱す。大言すれば則ち水地は共に質なり。麁濁なる者は氣と曰う。火は地に在りて水に對する者なり。而して大言せば則ち日は天に在るの火なり。然れども日火は自から専主有り。故に天日地水の偶は、古より専稱無し。故に今、華液と稱し、以て偶名と爲す。